

書評

「黄砂 — その謎を追う」

(岩坂泰信著, 紀伊國屋書店)

三重大学 萩原 彰

評者は太平洋岸に住んでいるせい、日常生活で黄砂の影響をあまり感じることはない。せいぜい春先に、車に積もる微細な砂埃が気になる程度である。しかし黄砂に近い韓国では、高い黄砂濃度が観測されると、学校の休校、屋外行事の禁止などの措置が取られるという。また黄砂の発生源である中国西部では、農作物や家畜に深刻な被害が出ることもあり、飛行機など交通機関への影響も大きい。本書は「春の風物詩」としてとらえられがちな日本と、中韓両国との黄砂被害や対応の違いから説き起こし、黄砂と地球環境問題とのかわり、黄砂と海洋プランクトンの関係など黄砂の持つ多様な側面を明らかにしている。

本書の基軸をなしているのは、著者の黄砂研究史であるが、タクラマカン砂漠から太平洋中央部まで流れていく黄砂の雲を人工衛星画像で目撃した時の感銘、タクラマカン砂漠での気球観測による黄砂の振る舞いの観測に伴う労苦など、研究にまつわる具体的なエピソードが時系列的に配列されることによって、著者と共に黄砂の謎に挑むようないきいきとした臨場感を感じることができる。とりわけ圧巻なのが「タクラマカン砂漠でひとたび砂塵嵐が起きると、いつまでも砂塵が流れ出してくる」のはなぜかという疑問を、山谷風、低気圧、地形という複合的要因からなるモデルで解明し、またそれを気球観測で実証していく過程である。

また著者はユニークな視点をいくつか提示している。たとえば黄砂が中国沿岸部、韓国、日本といった工業地域を通過する際に、その表面でさまざまな化学反応をおこす「空とぶ化学工場」とあるという視点、小さな生きものにとっては黄砂雲が「擬似的な大地」とあるという視点などである。

黄砂が地球の大気-海洋-生物システムにどのような影響を与えているのか、また温暖化との関連など、残された課題は何かということについても手際よく述べられており、環境に関心を持つ方ならば興味深く読むことのできる本であろう。